

小川泰治

宇部工業高等専門学校

関東でカント倫理学研究に挫折しつつあるなか哲学対話に出会い、気づけば今は山口の高専社会科教員、先生っぽくありたくないのにどんどん先生っぽくなっちゃうことに戸惑う優等生系哲学対話実践者。

なぜ「フィロソフィーネーム」をつけるのか

——哲学対話における名前と呼びかけの問題のための試論

発表内容

1. 哲学対話とフィロソフィーネーム

いくつかの文献から、「呼ばれたい名前」をつけること（「Pネーム」）とはどのようなねらいのもと使われるのかを確認します

既存の関係性からの自由／差異の確認や承認

2. 学校でPネームを使うということ

私自身の実践を通して、学校でPネームを使ってみて、感じたこと、気づいたことをふりかえります

3. Pネームを通してみえる哲学対話の論点

ここまでの話をふまえ、いくつかの哲学対話における論点と接続を試みます

- ・ 誰が言ったのではなく何を言ったかが重要、なのか？
- ・ 「○○さんが言ったように」
- ・ 対話の場の所与のものを問う

問い・考えたいこと

Pネームって知ってるけど、あまり自分が意識的に実践で取り入れることはない。でもどういう意図でみんなはやってるんだろう？あるいはやらないんだろう？調べてみたいな！

哲学対話でも他のWSでも、「呼ばれたい名前」を使うという「手法」は一種の「アイスブレイク」として知られている。

しかし、哲学対話という文脈で考えるときそれは単なる手法やアイスブレイクにとどまるものなのか。

- 哲学対話の場で「呼ばれたい名前」をつけることにどのような意味があるのだろうか
- なぜわざわざふだんの関係で呼ばれる名前を使わないのか
- 対話のなかでその名前を呼び合うとき、そこで何が起きているのだろうか

0. 対話と名前

Pネーム実践は単なるアイスブレイクではない？
対話にとっての名前を呼ばれることの意味

日常的な場面で「名前」が呼ばれるとき、それとともに「対話」が始まる。[...]私がなんの脈絡もなく唐突に「私はきのうドライブに行った」と言えば、異様な感じを与えるにちがいない。対話の場面においては一人称を主語とする文は、たとえば「あなたはきのうなにをしていたの」といった二人称による問いかけや呼びかけを前提とする。**私はまず「語る」のではなく「聞く」のである。**(村岡 2020: 130)

きわめて社会との繋がりが強く表される「名前」を自分で決めること、あるいは他者から付与された呼び名であっても、それを自分の意志で選択して使用することは、社会のなかに自分を位置づける際にもっとも重要な論点のひとつであろう。(岡村 2015: 141)

- 名前が呼ばれることで対話が始まる
⇒まず問いかけや呼びかけを聞く
- 名前を自分で決めることは社会のなかに自分を位置付けること

発表内容

1. 哲学対話とフィロソフィーネーム

いくつかの文献から、「呼ばれたい名前」をつけること（「Pネーム」）とはどのようなねらいのもと使われるのかを確認します

既存の関係性からの自由／差異の確認や承認

2. 学校でPネームを使うということ

私自身の実践を通して、学校でPネームを使ってみて、感じたこと、気づいたことをふりかえります

3. Pネームを通してみえる哲学対話の論点

ここまでの話をふまえ、いくつかの哲学対話における論点と接続を試みます

- ・ 誰が言ったのではなく何を言ったかが重要、なのか？
- ・ 「○○さんが言ったように」
- ・ 対話の場の所与のものを問う

1. 哲学対話と フィロソフィーネーム

定義の確認①

[Pネームとは、]哲学をする時間だけに用いる新しい名前のことです。たとえば、ある組織へ外部からファシリテーターとして派遣される場合には、組織内部での関係性のために、参加者が自由に自分の考えを話すことがしづらいことが予想されます。そんな時には、哲学する時間に用いるPネームを使います。当然のことながら、自己紹介はPネームのみにし、所属や肩書は紹介しない方が良いでしょう。

Pネームは、基本的に自分で決めます。昔のニックネームやSNSのアカウント名、昔から呼ばれたかった名前、その場で思いついたもの。Pネームは、どんな名前でも構いません。名札に書いてもらい、哲学の時間のときにはつけてもらいましょう。また、目的に鑑みて他の時間に持ち越さない方がよいでしょう。

(河野編 2020: 166. なお、この箇所の執筆は村瀬智之と中川雅道による。)

- 哲学する時間だけの名前
- 所属や肩書は紹介しない
- 基本的に自分で決める

1. 哲学対話と フィロソフィーネーム

定義の確認②

これ[Pネーム]は、いつもの自分から離れて自由になるという意味があるし、実際そのような効果があるように思われる。(梶谷 2018: 212)

あだ名で呼ばれることにより、生徒は普段の自分と少し距離を置いて物事を考えることができるようになる

(川田 2011: 25)

これ[Pネーム]には一種の演劇的な効果がある、普段とは少し違う自分になれて、そのことで普段の人間関係から離れて自由な発言ができるようになります。(河野 2018: 128)

- 自由になる
- 普段の自分や関係性から距離を置く
= 「一種の演劇的な効果」

1. 哲学対話と フィロソフィーネーム

関係性の「攪乱」

こうした不揃いな「本人が呼ばれたい名前」での対話は、通常ならわれわれの共有する文化的背景によって有無を言わず決定される年齢・地位・性別などの外見による互いの立ち位置や関係性を攪乱する。当然、所属や立場をあらわす自己紹介は行わない。

[...]参加者の社会的地位や属性によってディスカッションが支配されてはいくら話しても対話にはならない。 (五十嵐 2016: 68-69)

- 自由に考えることを阻害するもの（互いの立ち位置や関係性）を「攪乱する」
- 哲学カフェにおける「中心を空白に保つ仕掛け」の一つ

1. 哲学対話と フィロソフィーネーム

なぜ自分で名づけるのか

- ・「自由」になる
- ・いつもの自分や関係性から距離を置く
＝「一種の演劇的な効果」
- ・関係性を「攪乱」する

私たちが既存の関係性や立ち位置から自由になり、哲学の対話を始める、そのための環境を整える装置

では、匿名の対話のほうがよりよいのか？

自分で名前を決めずにランダムに割り振ればいいのか？

Pネームを自分でつけることの意味はなにか？

1. 哲学対話と フィロソフィーネーム

なぜ自分で名づけるのか

差異の表現と承認①

[ハワイの実践に参加しコミュニティボールを作る際の自己紹介で]

名前を名乗る段階からして、自分の本名ではなく、「この場で呼ばれたい名前」とすることにより、本名をそのまま使う人、子どもころからのニックネームを使う人、個性的な名前ですんでほしいという人など、それぞれの人となりが差異として浮かび上がってくる。

(高橋・ほんま 2018: 83)

- ボールづくりの際の自己紹介的なトピックと相まって、「それぞれの仕方でこの場に参加を許容されているのだ、ということ」があらわになる
- そのためには、各自が自分で呼ばれたい名前をつける必要がある

1. 哲学対話と フィロソフィーネーム

なぜ自分で名づけるのか

差異の表現と承認②

「呼ばれたい名前を自分自身に主体的に付け、その名で呼び合うことで参加意欲が高まり、また、互いを尊重する気持ちを示しています」(綿内 2018: 73)

対話の場を「セーフな場にする」ための工夫の一つ

(綿内 2018: 61)

「哲学を単なる思考法や思考体系へと縮減させることなく、生身の私自身を貫いて問い、哲学を実践するための、一つの態度表明である」(ほんま 2013: 93)

- 自分でつけた名前で参加する（参加意欲）
- その名前で呼び合う（相互尊重）
- 生身の自分自身で問い、哲学すること

1. 哲学対話と フィロソフィーネーム

まとめ

- ・この発表ではPネームが哲学対話にとっての必要条件であるといった主張はしない
- ・ただし、少なくともPネームは、**私たちが共に哲学をはじめようとするときの、基本的な態度と通底している**とは言えそうである

- ・ **お互いの差異を前提としたうえで、**
- ・ **既存の関係性や通常的自由になり、**
- ・ **生身の自分自身として考える**

「全員で哲学者になる」ための「やや儀式めいた行い」

(本間 2013 93)

- ・ Pネームは上記のことを、通常意識されている以上に、明白に示しているともいえるかもしれない。
- ・ それは、**私たちが対話のなかで何度もお互いの呼ばれたい名前を呼び合うからであり、呼び合うたびにその場の差異を明確に現わす名前を聞くからである。**

1. 哲学対話と フィロソフィーネーム

まとめ②

| | 通常の名前 | Pネーム | 匿名 | ランダム の呼び名 |
|----------------|-------|------|----|--------------|
| 自分で決める | × | ○ | ○ | × |
| 既存の関係 からの自由 | × | ○ | ◎ | ○ |
| 差異の承認 | × | ◎ | △ | × |
| 哲学の主体 である宣言 | × | ◎ | × | × |

発表内容

1. 哲学対話とフィロソフィーネーム

いくつかの文献から、「呼ばれたい名前」をつけること（「Pネーム」）とはどのようなねらいのもと使われるのかを確認します

既存の関係性からの自由／差異の確認や承認

2. 学校でPネームを使うということ

私自身の実践を通して、学校でPネームを使ってみて、感じたこと、気づいたことをふりかえります

3. Pネームを通してみえる哲学対話の論点

ここまでの話をふまえ、いくつかの哲学対話における論点と接続を試みます

- ・ 誰が言ったのではなく何を言ったかが重要、なのか？
- ・ 「〇〇さんが言ったように」
- ・ 対話の場の所与のものを問う

2. 学校でPネームを使うということ

学校空間と呼称

学校における生徒間および教師生徒間の呼称の選択は、日々のコミュニケーションの問題と直結している

生徒・学生同士がどう呼び合うか

- ・ 親しい友人関係のあいだで用いられる「あだ名」
- ・ 「あだ名」は一方的かつ暴力的に名づけられることも
- ・ あだ名を禁止する学校があることも話題に

教員が生徒・学生をどう呼ぶか

- ・ 男女を「さん」と「くん」で呼び分けるのか、一律に「さん」をつけるのか、呼び捨てするのか、名字ではなく名前のみで呼ぶのか、など様々な可能性
- ・ **生徒が教師を〇〇先生と呼ぶのか、あだ名で呼ぶのかといったことにも関係性は如実に表れる**
- ・ 生徒たちが教師のいないところで本人には聞かせられないようなあだ名をつけるということもしばしばある

-
- 私たちは人になんと呼ばれるのか、を実は非常に気にしている
 - 呼称はわかりやすく、呼んだものと呼ばれたものの関係性——親密さやパワーバランスといった非常に繊細で切実なもの——をあらわにする

2. 学校でPネームを使うということ

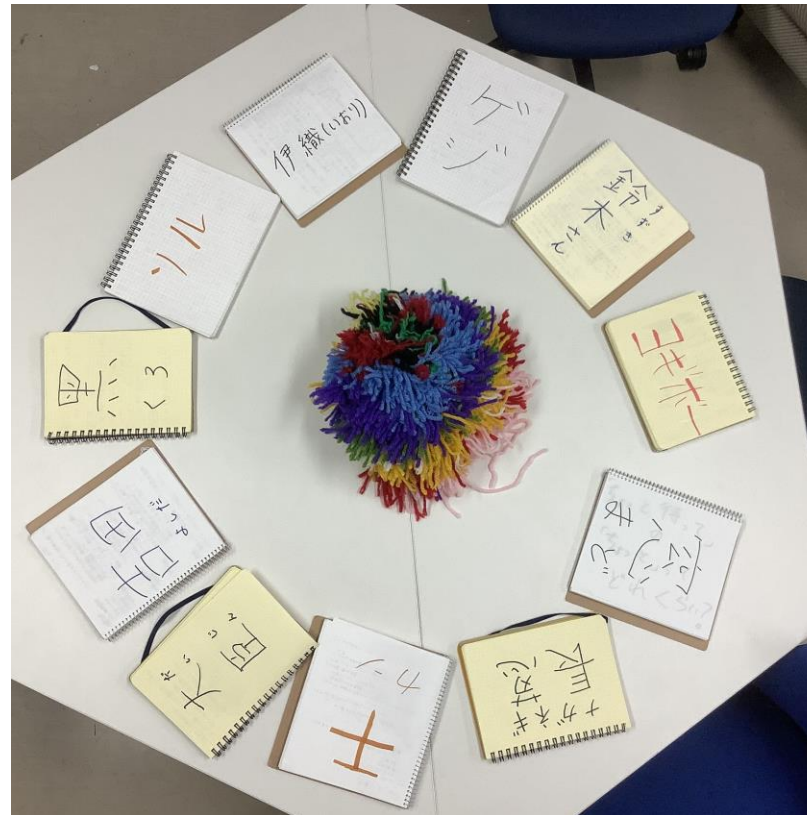
国内の先行する実践例の少なさ

- ・ **学校の必修授業でいきなりPネーム実践をすることのさまざまな困難**
- ・ ほんとうに呼ばれたい名前を自分で名づけること自体への戸惑い、恥ずかしさ、既存の関係性の固定観
- ・ 先行する実践（川田 2011, 藤本 2020など）は、少人数授業や選択授業の場あるいは放課後の自主的な参加の場である

2. 学校でPネームを使うということ

小川実践より①

- ・ 宇部工業高等専門学校での「プロジェクト学習」「哲学対話でファシリテーションを学ぼう」
- ・ 2022年7月後半から3週間ほどの期間、原則毎日90分2コマ程度の時間に集中的に取り組む
- ・ 全12名、2年生～5年生と幅広く、初対面かそれに近い関係が半数以上を占めた



- ・ ゲジ
- ・ ソル
- ・ 伊達メガネ
- ・ 伊織
- ・ 鈴木さん
- ・ ヨギボー
- ・ 窓
- ・ 長葱
- ・ 干大臣
- ・ 吉田
- ・ 黒
- ・ MAY

2. 学校でPネームを使うということ

小川実践より②

従来指摘されていた効果について

【自由に考える、関係性の「攪乱」】

【自由に考える、関係性の「攪乱」】

ある程度の実感があった

- ・「たとえば、みんなの本名を知らなかった」（学生）
- ・学生の教務システム上の氏名と授業中のニックネームとが一致せず、成績入力ミスをしそうになる（教員）

ただし、効果は限定的

- ・学生は「**窓先生**」と呼んでいた
- ・学生どうしも「（長）**葱先輩**」「**干先輩**」のように関係性を現わす呼称とセットで用いていた

呼称による攪乱を徹底するのであれば、あくまでPネームとして本人がつけた名前になんらの敬称をつけずに呼ぶ、ということ徹底すべきであった

2. 学校でPネームを使うということ

小川実践より③

従来指摘されていた効果について

【差異の表現と承認】

【差異の表現と承認】

名前のつけ方は様々であり、「それぞれの人となり
が差異として浮かび上がってくる」ように感じた

ただし、それがどの程度、対話の場を「セーフにする」
ことに効果を果たしたのかは、わからない。

短期間の集中的な実践であったこともあり、12名のあ
いだには独自の連帯感があり、解散を名残惜しむ声も
あった。

この点はたとえばコミュニティボールづくりや他の活動との
複合的な要素による部分が大きいだらう。

2. 学校でPネームを使うということ

小川実践より④

もう少し自分の実感に即してみる

【名前にその人が何者であるかが乗る】

【名前にその人が何者であるかが乗る】

「呼ばれたい名前」は、その名前を呼び、呼ばれるときに、その人が何者であるのかを浮かび上がらせる

通常学校で使う氏名では起きないこと。**教員と学生、あるいは学生どうしの出会いの時点ですでに与えられている、所与のものだから**

Pネームは、自分たちが対話を開く際にそこではじめて名付けられたものであるから、**その名前の誕生の瞬間に全員が立ち会っている**

2. 学校でPネームを使うということ

小川実践より⑤

もう少し自分の実感に即してみる

【Pネームは探求にとってノイズか】

【Pネームは探求にとってノイズか】

- ・ ある意味では対話にとってノイズにも思われるかもしれない
- ・ 学校の通常の活動にとっては明らかにノイズ

呼称がバラバラであることは学校のもつ管理的な面には
ジャマなこと

- ・ 哲学対話にとっては、これは単なるノイズではないなにかであるように思われる
- ・ 対話をする以上はお互いに名前を呼びかけ合っている。対話の相手がどんな人であったか、ということが呼び合う際に惹起されることはノイズではない。むしろ対話にとって本質的な要素の一つであるといえるのではないだろうか。

だからこそ、Pネームは、教員や学生の思考や意識を哲学するモードへとスムーズに移行させることができる。

2. 学校でPネームを使うということ

小川実践より⑥

滑稽さと恥ずかしさと

・「じゃあな、ヨギボー！」というからかい

・「完全に、初めにつけたあだ名が僕の中ではみんなの本名です。僕も今後、先生と話すときは“鈴木さん”として出迎えて貰えるとなんか嬉しいです。」

「どんな名前の、だれが語ったのか」という要素は哲学の対話をふりかえり、それを記憶するときには容易には消えない

対話の場面で「自分が何と呼ばれたのか」ということも決して無視できない対話の要素ではあるはず

2. 学校でPネームを使うということ

嘘くささを引き受ける

そうはいつでも、はじめて自分が参加者として「呼ばれたい名前を」と言われたとき、**白々しい気持ち**がしたのもおぼえている。嘘くさいな、と思った。そんなことで、普段の自分を脱ぎ捨てられるわけがない。違う名前を言うのも恥ずかしい。

哲学対話では、その**自己紹介をしないこと**に気を払う。そして、新たな名前で自らを名付け直すことをやってみる。名前というのも、他者から受け取るものだ。たとえ普段から呼ばれている名前でもいい。でもそれを改めて、自分で名付け直し、引き受け直すというところに何か、異なることをしようとしているうごめきを感じる。

それでもやはり嘘くさい。だがその嘘くささも引き受けねばならない。(永井, 2022)

- 哲学対話は、他の対話や話し合いとなにか「異なることをしよう」としている
- 他の場とは違う異様さ、嘘くささ、白々しさ
⇒それを引き受けることで、哲学の対話の場は成立するのではないか

発表内容

1. 哲学対話とフィロソフィーネーム

いくつかの文献から、「呼ばれたい名前」をつけること（「Pネーム」）とはどのようなねらいのもと使われるのかを確認します

既存の関係性からの自由／差異の確認や承認

2. 学校でPネームを使うということ

私自身の実践を通して、学校でPネームを使ってみて、感じたこと、気づいたことをふりかえります

3. Pネームを通してみえる哲学対話の論点

ここまでの話をふまえ、いくつかの哲学対話における論点と接続を試みます

- ・ 誰が言ったのではなく何を言ったかが重要、なのか？
- ・ 「○○さんが言ったように」
- ・ 対話の場の所与のものを問う

3. Pネームを通して みえる 哲学対話の論点

誰が言ったのではなく何を言ったかが重要、なのか？①

「誰が言ったのではなく何を言ったかがより重要である」

確かに探究にとっては、発言者の人格や属性と発言の内容を切り分けることは重要である

なおかつ、Pネームを使用する意図も一部はそこにある

「哲学対話をしていくうちに、誰が言ったのかが気にならなくなってくることもある」

こういった発言は、その探究に集中できていることを示す言葉のように聞こえる

「探求の共同体の特徴は、論理の統制を受けた対話によってなされる点にある。」(リップマン 2014: 131)

「教室が探求の共同体に作りかえられたとき、議論が導くところについていくためのステップは論理的なステップである。」(リップマン 2014: 132)

探究の共同体で重視されるのは、「個人」よりも「論理」

3. Pネームを通して みえる 哲学対話の論点

誰が言ったのではなく
何を言ったかが重要、
なのか？②

私たちが日々行っている「哲学対話」では、
「誰が何を言ったか」よりも

「言われた内容はなにか、またそれは前後の発言や問いとどう関係しているのか」を重視するように見える

だが、ほんとうに、そのように言ってよいだろうか。

-
- ・ **ある発言を発した人はその個人当人でなくてもよかったのか。**
 - ・ **「対話」の場においては、語られる内容はその人によって語られたことに意味があるのではないだろうか。**
 - ・ **その意味とは、哲学対話における「探究」や「哲学」の要素とどれほど関係しているのだろうか。**

3. Pネームを通して みえる 哲学対話の論点

「〇〇さんが言った
ように」

創造性とは、より新しいということであり、以前の文脈が存在していなければ、その新しさ自体を認識することができない。**実は探求の共同体の中での、「〇〇さんが言ったように」という他の人の意見への言及は、この文脈を作る作業そのものである。**以前に発言されたことをたどることで、私たちは自分の意見の位置を探る。何の文脈もない所では私たちは、探求することはない。そして、**そのような動的なプロセスの中で探求の共同体は形成されていく。**
(中川 2020: 33)

p4cを実践しているクラスに団結力が生まれるのは、話し合いの中で**ケアリングによって、クラスのメンバーの各々が「認められている」と感じるようになる**からだ。そして、大人たちも同じように輪の中に入って、子どもたちの声を聴くことで、大人が子供を認め、関心をもって接する契機にもなるのである。(中川 2020: 34)

対話の場では、「〇〇さんが言ったように」と名前が言及されることがある。Pネームに限らないが、名前を呼ばれるということが探究の中に位置づいている。

3. Pネームを通して みえる 哲学対話の論点

対話の場の所与のものを問う

哲学対話にとっては、**すでに所与のものを所与性を問う、ということはおそらく大切なこと。**（当たり前を問う）

対話に集まった個々人のもつ、**所与のもの・変えられないものの代表の一つが名前**

所与の名前に違和感をもたない人にとっては、それを問うことやそこに問いをもつ人がいることが想像しづらい

だから、

対話の始まりに存在している「名前」について問わない哲学対話は、最初のステップですすでに「問われてもよいもの」を素通りしているとも言える

「呼ばれたい名前」に名前をつけなおし、なぜその名前にしたのかを聞き合うことは、哲学対話とはどんなことをする場であるのかを明示することにもなる

発表内容

1. 哲学対話とフィロソフィーネーム

いくつかの文献から、「呼ばれたい名前」をつけること（「Pネーム」）とはどのようなねらいのもと使われるのかを確認します

既存の関係性からの自由／差異の確認や承認

2. 学校でPネームを使うということ

私自身の実践を通して、学校でPネームを使ってみて、感じたこと、気づいたことをふりかえります

3. Pネームを通してみえる哲学対話の論点

ここまでの話をふまえ、いくつかの哲学対話における論点と接続を試みます

- ・ 誰が言ったのではなく何を言ったかが重要、なのか？
- ・ 「○○さんが言ったように」
- ・ 対話の場の所与のものを問う

おわりに

Pネームをアイスブレイクにしておくのはもったいない

対話は（名前を）呼びかけ合うことで始まる

そうであれば、

名前を呼ばれるということ、そして、その名前を自分で付けなおすことは、対話において重要な要素になるのではないか

だとすれば、

Pネームには「本題」のための「アイスブレイク」としての意味以上に、哲学対話の最初の探究にふさわしいテーマになりうる

「あなたの呼ばれたい名前はなんですか？なぜその名前を選んだのですか？」と問い、全員の語りをじっくりと聞く。

そして問いを重ね、そこを起点にして探究を始めていく。

(Cf: アーダコーダ 横須賀学院小学校2021年の実践)

参考資料一覧

- 五十嵐沙千子(2016)「対話である越境—オープンダイアログ、討議倫理、あるいは哲学カフェの可能性をめぐって—」『哲学・思想論集』(42), 64-46.
- 岡村圭子(2015)「呼び名と社会的身体: シンポジウム「姓名とエスニシティ」によせて」『マテシス・ユニウェルサリス』(16) 2, 135--145.
- 梶谷真司(2018)『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』幻冬舎.
- 川田有希 (2011)「生徒は何を考えるのか」『臨床哲学のメチエ』(17).
- 河野哲也(2018)『じぶんで考えじぶんで話せる こどもを育てる哲学レッスン』河出書房新社.
- 河野哲也ら編著(2020)『ゼロからはじめる哲学対話』ひつじ書房.
- 高橋綾・本間直樹ほんまなほ(2018)『こどものてつがく ケアと幸せのための対話』大阪大学出版局.
- 永井玲衣(2022)「名前は【難しい対話】」東洋館出版社ウェブ連載<https://www.toyokan.co.jp/blogs/edupia/taiwa05>.
- 中川雅道(2020)「～さんがいったようから始まるケアリング」『これからの話し合いを考えよう』ひつじ書房.
- 藤本啓子(2021)「今日は何をするの?—須磨友が丘高等学)」『哲学対話と教育』大阪大学出版会, pp.113-132.
- 本間直樹(2013)「話す、自分を見せる、変わる: 対話から場を考える」『臨床哲学』15 (1) 86-94.
- 村岡晋一(2020)『名前の哲学』講談社.
- M.リップマン(2014)『探求の共同体 考えるための教室』玉川大学出版部.
- 綿内真由美(2018)「ねじ花はねじ花のように——「倫理」哲学対話の記録」『哲学』(69), 60-73.